

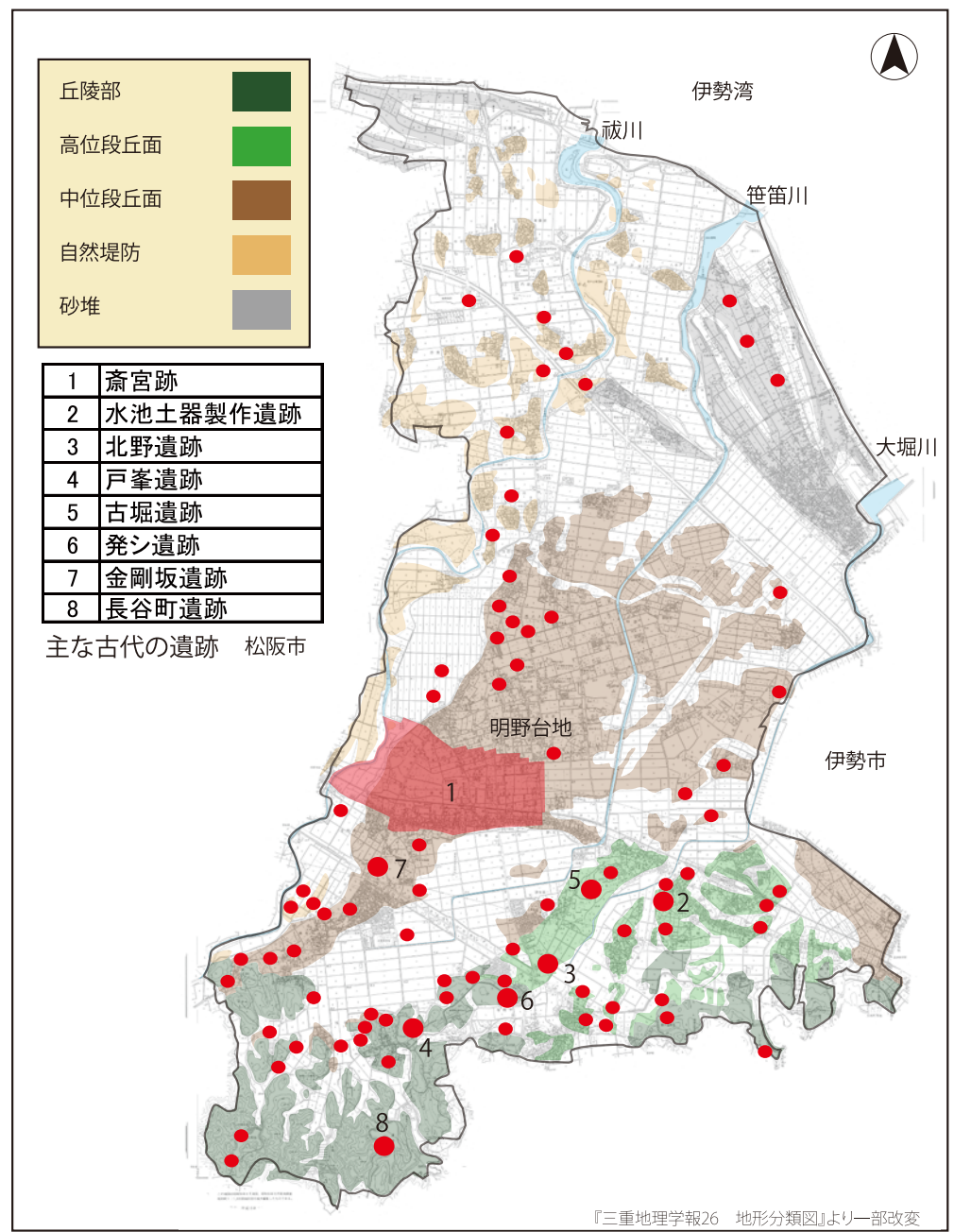
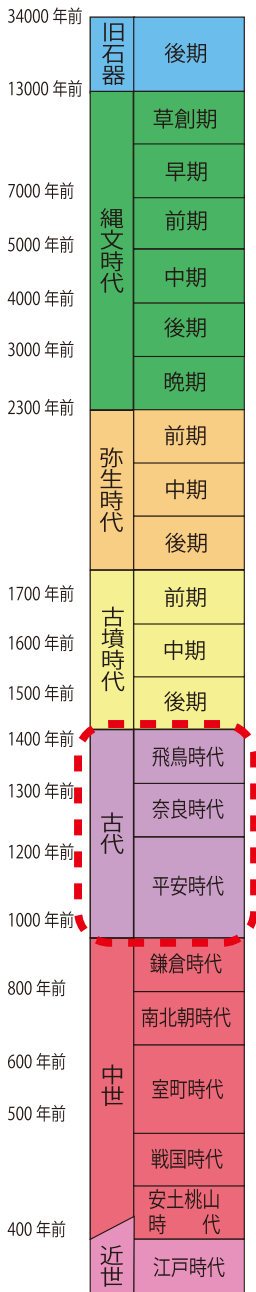


古代とは、中国大陸からの影響を受けて成立した都城や寺院が造られ、日本が天皇を中心とした国家として法律や税などを定め、律令国家として成立した飛鳥時代から平安時代の終わりまでを指します。「多気郡」(当時はたけぐん)が名付けられたのもこの時期で、古代多気郡で今の明和町にあたる地域には「有爾郷」「多気郷」^{おみごう}「麻続郷」がありました。

古代の明和町で特徴的なのは、なんと^{さいくうりょう}いっても齋宮寮^{さいくうりょう}の存在です。673年に大来皇女^{おおくのひめみこ}が齋王として選ばれ、伊勢神宮に向かうとともに、齋宮周辺も整備されたと考えられます。

その後、明和町全域が伊勢神宮の^{しんりょう}神領となり、伊勢神宮と齋宮を支える集落や、関連する人が住む集落が増え、奈良時代以降に明和町の人口は爆発的に増えたと考えられます。明和町の古代の遺跡は大きく分けると、①官衙的・祭祀的性格もある齋宮寮、②伊勢神宮、齋宮寮を支えた土器生産集落、③伊勢神宮・齋宮寮を支えた生産集落、④齋宮寮を支えた流通集落、⑤齋宮寮に関連した人物が葬られた墓、の5種に分けることができます。

齋宮寮がなぜこの地に造られるようになったか明確な答えはいまだ出ていませんが、齋宮寮が造られたことによって、明和町の地域は大きく発展したといえます。



①官衙的・祭祀的性格もある斎宮寮

明和町だけでなく、三重県下最大の古代遺跡。全国的に見ても、斎宮は唯一のものです。飛鳥時代に一部が造られ、大来皇女が斎王として派遣されました。古代都城を模した方格地割が平安時代前期に造られ、「竹の都」とも呼ばれました。



復元された「さいくう平安の杜」
(史跡斎宮跡)

②伊勢神宮、斎宮寮を支えた土器生産集落

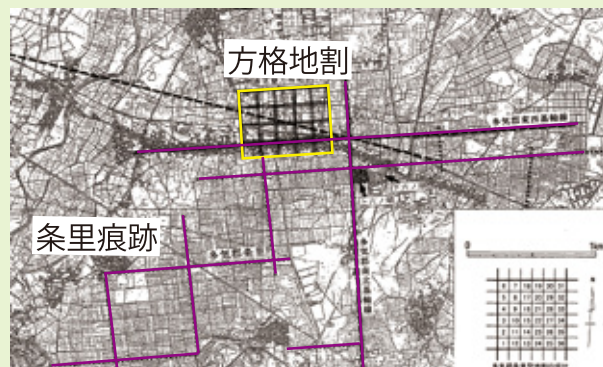
土師器を焼いた焼成坑しょうせいこうと呼ばれる特殊な窯が造られた集落で、伊勢神宮や斎宮に土器を貢納していました。主な遺跡としては、水池土器製作遺跡・北野遺跡・戸峯遺跡などがあります。町内では、これまでに計 500 基以上が確認されています。



発掘された「土師器焼成坑」(戸峯遺跡)

③伊勢神宮・斎宮寮を支えた生産集落

古代に神郡として伊勢神宮に寄進された多気郡では、伊勢神宮に米などを貢納していました。現在に続く集落の一部は、古代に始まったと考えられ、有爾、麻統おみ(中海)、志貴、浜田、根倉などの名前が古文書じょうりちわりに出てきます。また、斎宮地区の一部の条里地割の痕跡は、古代にさかのぼると考えられています。



斎宮周辺の「条里地割」の痕跡

④斎宮寮を支えた流通集落

斎宮跡には、さまざまな物資が届けられました。主に東日本からの税によって斎宮寮の財政は成り立っており、それらを受け入れる港や中継基地などもあったと考えられます。斎宮寮の近くの金剛坂遺跡では、斎宮寮に納められる予定だったのか、「美濃」印が押された須恵器が出土しています。



「美濃」印須恵器 (金剛坂遺跡)

提供：斎宮歴史博物館

⑤斎宮寮に関連した人物が葬られた墓

斎宮に関連した人物は周辺に多くいたと考えられます。古代の墓はあまり見つからないことが多いですが、長谷町遺跡で平安時代の火葬墓りよくゆうとうきが見つっています。また、金剛坂遺跡では緑釉陶器を供えた木棺墓が確認されており、どちらも斎宮寮に関連した高貴な人物の墓であると考えられています。



火葬墓発掘状況 (長谷町遺跡)

提供：三重県埋蔵文化財センター